



サッカーから学んだ人生論

まな じんせいろん

川淵 三郎

かわぶち さぶろう

私がプレーしていた1960年代の日本は、プロ野球が人気でサッカーはマイナーなスポーツでした。古くから日本に伝わったスポーツにもかかわらず、人気の面でも技術的な面でもなかなかメジャーなスポーツにはならず、当時の私ですら、プロサッカー＝Jリーグが日本に誕生するとは思っていませんでした。

1960年、日本代表に選ばれた私は、合宿で初めてドイツのデュイスブルクのスポーツシュレを訪れました。デットマール・クラマー氏に会ったのはその時が初めてです。その後、東京オリンピックまでの4年間、私たちが代表選手は、コーチとなったクラマー氏にさまざまなことを学びました。それはサッカーの技術だけではなく、「人生の教訓」についても教わりました。

1964年の東京オリンピックでのこと。私たち日本代表は、世界の強豪アルゼンチンを相手に、奇跡とも言える逆転勝利をあげました。マスコミやサッカー関係者、同僚や友達など多くの人がお祝いにかけつけてくれました。その時、クラマーコーチは、「試合に勝ったものには友達が集まってくる。新しい友達もできる。しかし、本当に友人が必要なのは、敗れたときであり、敗れた方である。私はアルゼンチンを慰めに行く」と

言って、彼らの控え室に向かったのです。その時私たちはアルゼンチンに勝った嬉しさのあまり、彼の言葉や行動を気にもとめていませんでした。しかし、準々決勝でチェコに負けた時、彼は言ったのです。「君たちはよく戦った。しかしサッカーだけが人生ではない。今日はサッカーのことは全て忘れよう。負けてしまった今日、君たちのところにやってくる友達は少ないだろう。だが、今日の友達こそが君たちの本当の友達なのだ」と。

クラマー氏は、日本サッカーの父とも言われています。彼が優秀なコーチであったとしても人間的な魅力がなかったら、現在のように日本サッカーは発展しなかったらと思います。彼との出会い、そして彼が私たちに教えてくれた多くの事が、Jリーグを誕生させるエネルギーになったことは言うまでもありません。

スポーツは、感動や興奮だけでなく、友達との出会い、いたわりや助け合いの精神を育んでくれます。そういったことがスポーツを通じて得られる価値の高いものなのです。

Jリーグはこれからも、日本に、誰もが自由に気軽にスポーツを楽しめる環境を広げながら、フェアで魅力的なサッカーを提供していきたいと考えています。

(社)日本プロサッカーリーグ(Jリーグ)チェアマン)